

## 世界の中の日本 ～日本の動物薬市場～7

日本の動物薬企業はもっと積極的に海外に情報発信すべきです

アームズ株式会社 氏政雄揮

### 1. 寡占化する世界の動物用医薬品市場

全動薬協会報 No.364(2023年11月発刊)から始まった本連載で、2022年の世界の動物薬市場規模は410億ドル(約5.3兆円、\$1=¥130.4(22年平均為替))とBrakke Consulting, Inc.(以下BCI社)によって推計されていることを紹介しました。発行当時はまだ2023年の数値が未発表でしたが、今年も残り1ヶ月弱となり、2023年の数値をお示ししないまま、2025年に突入することとなりますので、ご紹介したいと存じます。

BCI社によれば2023年の市場規模は426億ドル(約5.9兆円、\$1=¥139.6(23年平均為替))とのことで、2022年と比較して3.9%伸長しています。

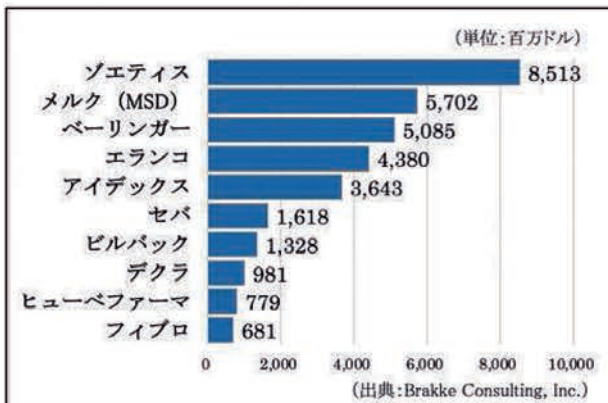


図1 トップ10企業の売上(2023年)\*1

図1はトップ10企業の売上とランキングを示しています。ゾエティス、メルク(MSD)、ベーリンガーインゲルハイム、エランコ・・・と続くランキングは、前年と変わりません。しかしBCI社によれば2023年にゾエティスが売上を一気に4.3億ドル伸長し、市場全体の成長の1/3を占め2位以下との差を広げたとのことです。

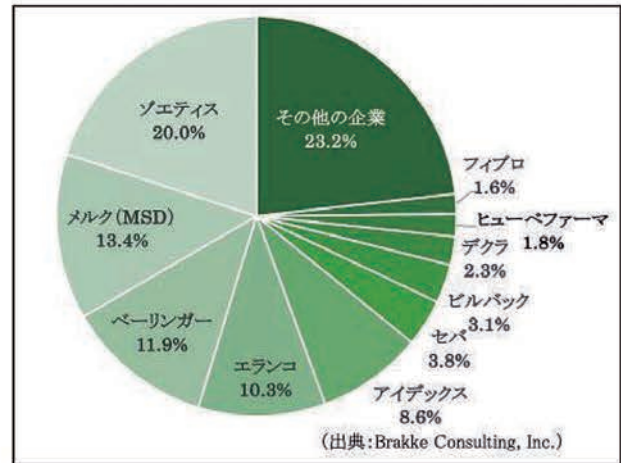


図2 動物薬メーカーの寡占状況\*1

また、上位企業による市場の寡占化が進んでおり、上位4社で世界の動物用医薬品市場の6割弱(55.6%)のシェアを占めているとのことです(図2)。

### 2. 世界ランクトップ15の動物用医薬品の売上

動物薬市場の寡占化は、単品で巨額の売上を上げるブロックバスター製品の売上からも類推できるかもしれません。

それを示すために、今号では個別の製品の売上について調査しました。S&P Global社が推計した2023年に世界で最も販売された動物用医薬品のトップ15製品を表1に示します。各製品の売上高はS&P Global社が企業の財務報告と推定値を使用してまとめているとのことです。

世界のトップ15製品を製造販売している動物薬メーカーが、前述の世界第1位から第4位までの企業で占められています(表1)。

個々の製品は読者の方々が既によくご存知のことと思いますので詳しく説明することは省略致します。また、表に記載の企業名や製品名は本来英語ですが、日本でも同名の製品名で製造販売承認がなされている場合、便宜的に日本語で表示しています。

全世界における売上ですので、一国や一地域に限定して販売されている動物用医薬品ではなく、多国籍動物薬企業が世界に展開して販売する製品の方が、売上が大きくなることは容易に想像できるのですが、結果としてその通りになっています。

動物区分では15品中、小動物用が13品と8割強を小動物用が占めています。いまや世界の動物用医薬品の売上の半分は小動物用が占めていますが、その理由は表に示すように単品で2億ドル(約280億円、\$1=¥139.6('23年))を超える売上規模の小動物用医薬品が数多くあることも主要な要因の一つであると考えられます。

なお、S&P Global社では年間1億ドル(約150億円、\$1=¥150)を超える売上規模の動物用医薬品をブロックバスター、10億ドル(約1,400億円、\$1=¥139.6('23年))を超える売上規模の動物用医薬品をメガ・ブロックバスターと呼んでいます。

次に、製剤区分をご覧下さい。防虫剤・殺虫剤が7品と内寄生虫駆除剤1品と、内部・外部寄生虫駆除のために使用される製品が半数以上を占めております。ここ10年で外部寄生虫駆除薬では世代交代が生じています。表のトップ3に属する製品はいずれもイソオキサゾリン系という全く新しいクラスの画期的な駆除薬です。ネクスガード、シンパリカ、ブラベクトの一般的名称はそれぞれアフォキシラネル、サロラネル、フルララネルで、相次いで動物用医薬品として実用化されました。

表からお分かりのように、トップ3はいずれも11億ドル(1,540億円、\$1=¥139.6('23年))を超えて売れるメガ・ブロックバスターとして成長しています。

治療薬としてアポキル(オクラシニブ)とサイトポイント(ロキベトマブ)が第4位と第5位にランクインしました。どちらもアトピー性皮膚炎に伴う症状の緩和およびアレルギー性皮膚炎に伴う掻痒の緩和を効能とするブロックバスターで、ロキベトマブは世界で最も売れている動物用モノクローナル抗体です。

第11位と第14位には生物学的製剤(ワクチン)がランクインしています。前者は豚サーコウイルス2型感染症に起因する死亡率の改善などを効能としています。豚サーコウイルス感染症が日本で蔓延した時のことを今でも鮮明に覚えています。当時は事故率が2割に達する農場もあり、日本の養豚産業の危機が叫ばれる状況でした。このワクチンは農林水産省で非常に迅速に審査が行われて承認され、多くの子豚が救われ、事故率が劇的に改善しました。豚サーコウイルス2型感染症に対するワクチンは、他社からも販売されており、さらに豚マイコプラズマ性肺炎の肺病変形成の抑制を効能とする混合ワクチンも開発されて日本で販売されています。

表1 2023年のトップ・アニマルヘルスプロダクト\*2

2023年 順位	2022年 順位	製品名	製造販売会社	動物区分	製剤区分	売上 (百万ドル)
1	1	ネクスガード	ベーリンガーインゲルハイム	小動物	防虫剤・殺虫剤	\$1,353
2	3	シンパリカ/シンパリカトリオ	ゾエティス	小動物	防虫剤・殺虫剤	\$1,111
3	2	ブラベクト	メルク(MSD)	小動物	防虫剤・殺虫剤	\$1,100
4	4	アポキル	ゾエティス	小動物	代謝性用薬	\$855
5	5	サイトポイント	ゾエティス	小動物	その他	\$684
6	7	フロントライン	ベーリンガーインゲルハイム	小動物	防虫剤・殺虫剤	\$455
7	6	アドバンテージ	エランコ	小動物	防虫剤・殺虫剤	\$430
8	10	ハートガード	ベーリンガーインゲルハイム	小動物	内寄生虫駆除剤	\$390
9	9	セレスト	エランコ	小動物	防虫剤・殺虫剤	\$345
10	8	レボリューション/Stronghold	ゾエティス	小動物	防虫剤・殺虫剤	\$342
11	12	インゲルバック サーコフレックス/フレックスコンボ	ベーリンガーインゲルハイム	食用動物	生物学的製剤	\$271
12	11	ルメンシン	エランコ	食用動物	飼料添加物	\$255
13	15	リブレラ	ゾエティス	小動物	神経系用薬	\$232
14	30	ピュアボックス	ベーリンガーインゲルハイム	小動物	生物学的製剤	\$199
15	26	ベトメディン	ベーリンガーインゲルハイム	小動物	循環・呼吸器官用薬	\$193

(出典: S&P Global)

第 13 位にランクされるリブレラ(ベジンベトマブ)は前出のロキベトマブと同じくモノクローナル抗体であり、ベジンベトマブは1ヶ月に1回の注射で犬の変形性関節症に伴う疼痛の緩和を可能にします。

犬の変形性関節症の疼痛緩和を効能とする動物用医薬品は、非ステロイド系抗炎症薬(NSAIDs)が主流の時代が長く続き、COX-2 選択性 NSAIDs、コキシブ系、ピプラント系と変遷しています。そこにモノクローナル抗体のベジンベトマブや猫用のソレンシア(フルネベトマブ)が開発されました。獣医療での選択肢が増えたことで、今後は個体に応じた選択が効果的に行われるものと期待されます。

なお特筆すべきはこのトップ 15 の動物用医薬品には抗菌薬が含まれていないことです。

S&P Global 社による 2022 年の製品別売上では第 14 位と第 15 位にドラクシン(ツラスロマイシン)とエクセネル(セフチオフル)がそれぞれ 2.1 億ドル、2 億 2 百万ドルの売上でランクインしていました。

しかし 2022 年の時点でどちらも対前年(2021 年)比で 2 桁のマイナスであったとのこと。

全世界の動物用医薬品市場で抗菌薬は 15%を占めることから、抗菌薬の必要性は依然として高く、抗菌薬が再びランクインする可能性ももちろんありますが、2023 年にトップ 15 から抗菌薬が消えたということは AMR(抗菌薬耐性)を意識した時代を反映していると感じずにはられません。

### 3. 今後の市場をどう予測しておられますか

本稿が刊行される頃には 2025 年を目前に控える状況になっています。

さて、皆様は今後の動物用医薬品市場や獣医療市場をどのように予測されているでしょうか？

BCI 社では 2024 年 1 月の時点で 4 つの予測を行っていました。図 3 はその内 2 つを抜粋したものです：

- 1) 動物薬市場を牽引するのは合剤の寄生虫駆除剤か？
- 2) 2024 年はモノクローナル抗体が潜在能力を発揮できるか？
- 3) 獣医師はいつまで価格上昇を転嫁できるか？
- 4) 大統領選挙の年 - 金利低下の影響は？



図 3 BCI 社による 2024 年の予測\*1

2024 年を振り返ってみましょう。

最初の二つ 1)と 2)はその通りですね。もちろん、2023 年の流れを引き継いでいるともいえますが、寄生虫駆除の合剤が市場の伸長を牽引しており、また複数のモノクローナル抗体の動物用医薬品がブロックバスターとして成長しており、2024 年はさらに伸長していると予測されます。

3)については、欧米では獣医療費の価格高騰に対して飼い主がついていけなくなり、英国で飼い主が犬を射殺したというニュース\*3や米国で高額な獣医療費を支払えずに安楽死を望む飼い主が増えているという記事\*4を目にします。日本では一般的に獣医師も飼い主も安楽死を選択することを好まないため問題が表面化していませんが、それが結果として飼育頭数の減少となり、より大きなボディブローとして跳ね返ってきているという意見もあります。

4)については米国では特に大きな混乱もなく大統領選挙が終わり、金利低下による期待から米国株が上昇しています。しかし、今後も一本調子で金利が低下するかどうかは予断を許しません。

さて、皆様の 2025 年の予測はいかがでしょうか？

BCI 社として 2024 年の答え合わせと 2025 年の予測は来年 1 月と 3 月開催される米国での BCI Animal Health Industry Overview でなされますが、現状ではほぼ予測通りの状況が訪れているといえそうです。

#### 4. 世界 50 位以内には、まだ未掲載の日本企業があるのではないのでしょうか？

S&P Global 社では世界第 50 位までのランキングを集計しています。第 10 位までは、図 1 で BCI 社のデータを示しましたので、第 11 位以降の企業のデータをお示します。

表 2 世界第 11 位から第 50 位の企業ランキング\*5

順位	企業名	本社所在国	2023年売上 (百万ドル)
11	Vetoquinol	フランス	572.3
12	Mars (診断薬部門)	米国	500.0
13	Hipra	スペイン	446.6
14	共立製薬	日本	444.7
15	Shandong Lukang	中国	365.6
16	Vimian	スウェーデン	358.7
17	CAHIC	中国	321.5
18	Tianjin Ringpu	中国	308.8
19	日本全薬工業	日本	302.3
20	PetIQ	米国	300.6
21	Norbrook Laboratories	英国	288.4
22	Bimeda	アイルランド	285.6
23	Neogen	米国	275.7
24	Biogénesis Bagó	アルゼンチン	240.3
25	Qingdao Yebio Bioengineering	中国	235.9
26	Fatro	イタリア	227.1
27	Swedencare	スウェーデン	219.3
28	Jinyu Group	中国	208.1
29	Agener União	ブラジル	190.0
30	Ouro Fino Saúde Animal	ブラジル	189.0
31	Pulike Biological Engineering	中国	175.1
32	SeQuent Scientific	インド	167.0
33	United Laboratories	中国	166.9
34	Haid Group	中国	154.9
35	Chanelle	アイルランド	147.1
36	TECON	中国	140.9
37	Vetanco	アルゼンチン	129.3
38	Bioveta	チェコ	122.7
39	Krka	スロベニア	113.1
40	Orion Animal Health	フィンランド	112.3
41	ECO Animal Health	英国	109.0
42	Guangdong Dahuanong Animal Pharmaceuticals	中国	104.2
43	Animalcare	英国	94.7
44	Zenex Animal Health	インド	87.3
45	Dômes Pharma	フランス	82.7
46	Intas Animal Health	インド	82.4
47	ささえあ製薬 (ビルバックが買収)	日本	78.1
48	Calier	スペイン	76.8
49	Syva	スペイン	68.1
50	Hebei Veyong Pharmaceutical	中国	52.3

(出典:S&P Global)

第 50 位までとなると、新薬メーカーだけでなくジェネリック専門のメーカーも含まれます。

いかがでしょう、この表をご覧になってどのようにお感じになりますか？

筆者はこの表に日本の動物薬メーカーが 3 社のみであるということ、そして 2023 年の売上が 52 百万ドルである中国企業が第 50 位にランクされてい

ることに驚きを禁じ得ません。為替をいくらで計算するかが課題ですが、2023 年の年間平均為替である \$1=139.6 円で換算すれば 52.3 百万ドルは 73 億円に相当します。

それ以上の売上有るのに、この表に掲載されていない日本の動物薬メーカーがまだあるのではないのでしょうか。

表 3 は本社が所在する国別にトップ 50 社にランクする企業数をまとめたものです。

ご覧のように中国が 11 社で最も多く、次いで米国 (8 社)、フランス・英国 (4 社) と続きます。

表 3 本社所在国別トップ 50 の企業数

本社所在地	企業数	本社所在地	企業数
中国	11	スウェーデン	2
米国	8	ブラジル	2
フランス	4	イタリア	1
英国	4	スロベニア	1
日本	3	チェコ	1
インド	3	ドイツ	1
スペイン	3	フィンランド	1
アイルランド	2	ブルガリア	1
アルゼンチン	2	総計	50

概して、日本の動物薬企業は外資系企業と比べて企業情報をリリースすることがまだ少なく、リリースしても、日本語のみのリリースが大半であるため、海外の調査企業の目に触れることがほとんどないのが実情です。

日本企業はもっと積極的に海外に情報発信すべきだと存じます。S&P Global 社の日本の窓口はアグリビジネスコンサルタントの秦 敦朗氏です。BCI 社には筆者から連絡可能です。企業業績だけでなく製品の承認取得、企業提携なども含めて積極的に情報発信なさることを強くお勧めします。

引用文献:

\*1 Brakke Consulting, Inc. Animal Health Industry Overview 2024

\*2 S&P Global “Top Animal Health Brands”

\*3 The Telegraph “Vet warns that people are shooting their pets because they cannot afford vet bills”

\*4 healthy paws “Pet Parents Forced to Choose Euthanasia Due to High Vet Bills”

\*5 S&P Global “Top 50 Rankings”